NHO NEW WAVE

vol.51 2024

独立行政法人
国立病院機構
National Hospital Organization

初期研修医・専攻医のためのコミュニケーション情報誌
NHO ニューウェーブ

発行：独立行政法人 国立病院機構 令和６年

SPECIAL 特集 良医研修「消化器内科セミナー」in 呉医療センター

HOSPITAL
病院クローズアップ
国立病院機構 金沢医療センター

PROGRAM
アレルギー専門研修プログラムの紹介
国立病院機構 三重病院

PROGRAM
初期研修プログラムの紹介
国立病院機構 東広島医療センター

MESSAGE
理事長メッセージ
理事長 新木 一弘

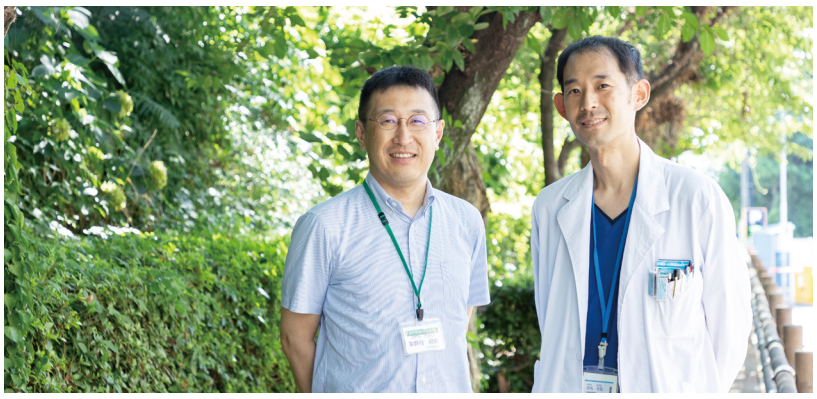
SPECIAL

特　集　良医研修「消化器内科セミナー」in 呉医療センター

令和6年度 良質な医師を育てる研修

～ センスとスキルを身につけろ！ 未来を拓く消化器内科セミナー ～

NHOでは、毎年、多彩な内容で“良質な医師を育てる研修”を開催しています。全国のNHO病院の経験豊富なスペシャリストたちの直接指導によって、実践的スキルと知識を身に付けられる充実のプログラムを提供しており、全国の参加者たちと交流できることも魅力です。今回は2024年8月1日･2日に呉医療センターで行われた「消化器内科セミナー」について紹介。セミナー講師を代表して、加賀谷尚史先生（金沢医療センター）と田丸弓弦先生（呉医療センター）にお話を伺いました。



■ 講 師

金沢医療センター
臨床研究部部長・
消化器内科部長

加賀谷 尚史

PROFILE

出　身　地：北海道
出身大学：金沢大学（1995年卒）
宝　　物：家族、友人
座右の銘：If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.

呉医療センター
消化器内科

田丸 弓弦

PROFILE

出　身　地：広島県
出身大学：長崎大学（2008年卒）
宝　　物：家族、友人
座右の銘：目の前のことから逃げない

『センスとスキルを身につけろ！未来を拓く消化器内科セミナー』について

加賀谷…消化器内科領域における“良質な医師を育てる研修”は、2016年度に仙台医療センターの鵜飼副院長（当時）、函館病院の加藤院長（当時）を中心に企画開始され、講師はNHO消化器研究グループに参加していた各施設の医師を中心に募集し、2017年3月に第１回目の消化器内科セミナーを開催しました。

消化器内科セミナーの意義は、『センスとスキルを身につけろ！』というサブタイトルに集約されています。NHOネットワーク研究グループ消化器分野のグループリーダーである九州医療センターの原田光学診療部長（当時）の発案で、「消化器内科医は、手に入れた豊富な知識を活用し、臨床の場で実際に使えるようにするためには、センスとスキルを身に付けることが重要」という信念から、『センスとスキルを身につけろ！』と銘打ち、知識やセンスを身に付ける座学と、内視鏡やエコーといったスキルを身に付けるハンズオンを組み合わせた2日間のセミナーとして開講されました。

消化器内科セミナーの特徴と参加する意義とは

加賀谷…消化器内科セミナーを始めた初期の頃は、座学が一日半、ハンズオンが半日というプログラム構成でしたが、参加された研修医の先生方から、「座学よりは、ハンズオンの方が普段の研修で得られない体験ができる」といった声が多くあり、回を重ねるごとにハンズオン中心のセミナーへとシフトしました。座学が少なくなった分は、事前にe-Learningを受講することによって基本的知識を得てもらい、CT読影、腹部エコー、消化器内視鏡（上部、下部、胆膵、ポリペクトミーや止血処置など）といったハンズオンを1日半かけて行っています。

第8回開催となる2024年8月1日･2日に行われた消化器内科セミナーでは、1日目は腹部画像診断のグループワークののち、腹部エコー手技の座学、腹部単純写真の読影を行い、2日目は上下部消化管内視鏡、ポリープ切除術、止血術、胆膵治療のハンズオンを行いました。消化器疾患の診断･治療に必要な基本的手技や治療難易度がそれほど高度ではないタスクをセレクトし、参加者のみなさんが“自分の手で治療ができる”という体験を通して、消化器内科の楽しさ、面白さを実感できるプログラムとなっています。

田丸…このセミナーでは、普段、研修医がなかなか経験できない処置も、講師であるスペシャリストたちから、手技のコツやポイントを傍で教えてもらいながら経験することができます。セミナーを通して消化器内科の魅力を知り、また、ハン

ズオンを通して手技の楽しさだけではなく、奥深さも体感していただき、「経験をたくさん積んで手技が上手くなりたい」という意欲が生まれてくるようなプログラムと指導を心掛けています。普段の自施設での研修や仕事の場ではどうしても遠慮してしまう場面もあると思いますが、このセミナーでは分からないことを気軽にどんどん質問できるなど、こうした機会だからこそ学べることも多いと思います。

消化器内科の魅力や必要なスキルとは

田丸…消化器内科の領域は、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸といった消化管から肝臓、胆道、膵臓疾患全般と非常に幅広く、さらに、内視鏡検査・治療、エコー検査など手技も多彩であるため、興味のある自分に合った専門領域や治療手技が見つかる診療科です。

加賀谷…消化器内科専門医としては、高度な内視鏡やエコー、CT・MRIなど画像診断を解釈し、高度化する治療、抗がん剤や抗腫瘍治療を適切に行うスキルが必要です。地域医療の先生からの紹介患者や救急では、「腹部症状」で受診される症例がとても多く、その原因は多岐にわたります。ごくありふれた腹部症状に、消化器以外の疾患も交ざっており、それらを的確に鑑別する“総合内科的”なスキルやセンスも必要となります。

また、消化器内科は「知識も必要、手技も必要」であり、かつ「カバーする臓器が多い」領域です。的確な診断によって治療できる領域も多く、また、新しい技術の開発も続いており治療できる領域も増えています。生涯勉強しながら続けることのできる、やりがいのある診療科です。

セミナー参加者の声や感想について

加賀谷…「楽しかった」という感想を多くいただいています。また、セミナーではグループワークによって1年目と2年目の先生がコンビを組み、2年目の先生が1年目の先生に指導的役割を担いながら一緒に腹部画像の所見を読むなど、全国のNHO病院の同期や先輩・後輩と一緒に学ぶことができます。そのため、「同世代の先生と交流も深めることができて良かった」という声も多くあります。

田丸…消化器内科セミナーは非常に人気があり、今回は募集人員に対して2倍以上の応募がありました。これまで消化器内科セミナーに参加してくださった先生方から、多くの高評価をいただいてきたこれまでの実績があるからこそだと感じています。

NHOで働く（研鑽を積む）魅力とは

加賀谷…NHOには全国140の病院からなるネットワークを活かした、学術面や友好面での交流もあります。一つの病院、一つの医局だけに留まるのではなく、NHOの全国各地の病院や医局の先生たちと交流し、情報交換や議論をすることで新たな知識を得たり、技量を磨くことができます。NHO病院で得られる知識やスキルは他施設よりも幅広く充実しており、そうして得たスキルを患者さんに還元できることは医師としての大きなやりがいにもなるでしょう。

田丸…“良質な医師を育てる研修”のように、NHOの各病院が連携した教育など、自分が所属している病院や医局だけではなく、全国のNHO病院の優れたスペシャリストたちからも直接指導を受けられるのは、他施設にはない大きな魅力だと思います。

医学生や若手医師たちへのメッセージ

田丸…消化器内科は幅広い分野があり、自分で検査、診断した後にそれを直接自分で治療ができるという数少ない診療科です。内科的アプローチだけではなく、手技や研究など、自分の興味に合わせて専門性を高めることもできます。消化器内科の楽しさ、やりがい、奥深さなどをセミナーを通してしっかり伝えたいですし、参加者のみなさんがそれを肌で感じていただき、一人でも多くの先生が消化器内科に進んでくれたらとても嬉しく思います。

加賀谷…過去にこのセミナーで学んだ先生方が、消化器内科に進み、消化器系の学会でお目にかかる場面が何度かあり、とても頼もしく思っています。このセミナーに参加した先生同士が、学会主題でdiscussionしたり、国際学会で活躍している場面が見られることを期待していますし、将来、消化器内科医として一緒に専門性を磨いていく仲間が増えることを楽しみにしています。

IMPRESSION　参加した先生の感想

入職して直ぐに、消化器内科セミナーがあることを上の先生に教えていただき、内視鏡やエコーといった手技に興味があったため、ぜひ参加したいと思いました。セミナーに向けて自院でも内視鏡やエコーに触れましたが、セミナーでは「エコーをなぜこの角度で当てるのか」といったきめ細かな教えや手技のコツを学ぶことができましたし、普段の臨床現場とは異なり、こうした機会だからこそ気兼ねなくたくさん質問することもできました。さらに、全国のNHO病院の同期たちとの交流によって、「自分も頑張らなければ」と大きな刺激を受けるなど、とても濃密で有意義な経験を得ることができました。

三重中央医療センター
初期研修医１年目
吉田　侑生

PROFILE

出身地：広島県
出身大学：富山大学（2024年卒）
宝物：家族、同期
座右の銘：失敗は成功の基

千葉医療センター
初期研修医２年目
加藤　彩理紗

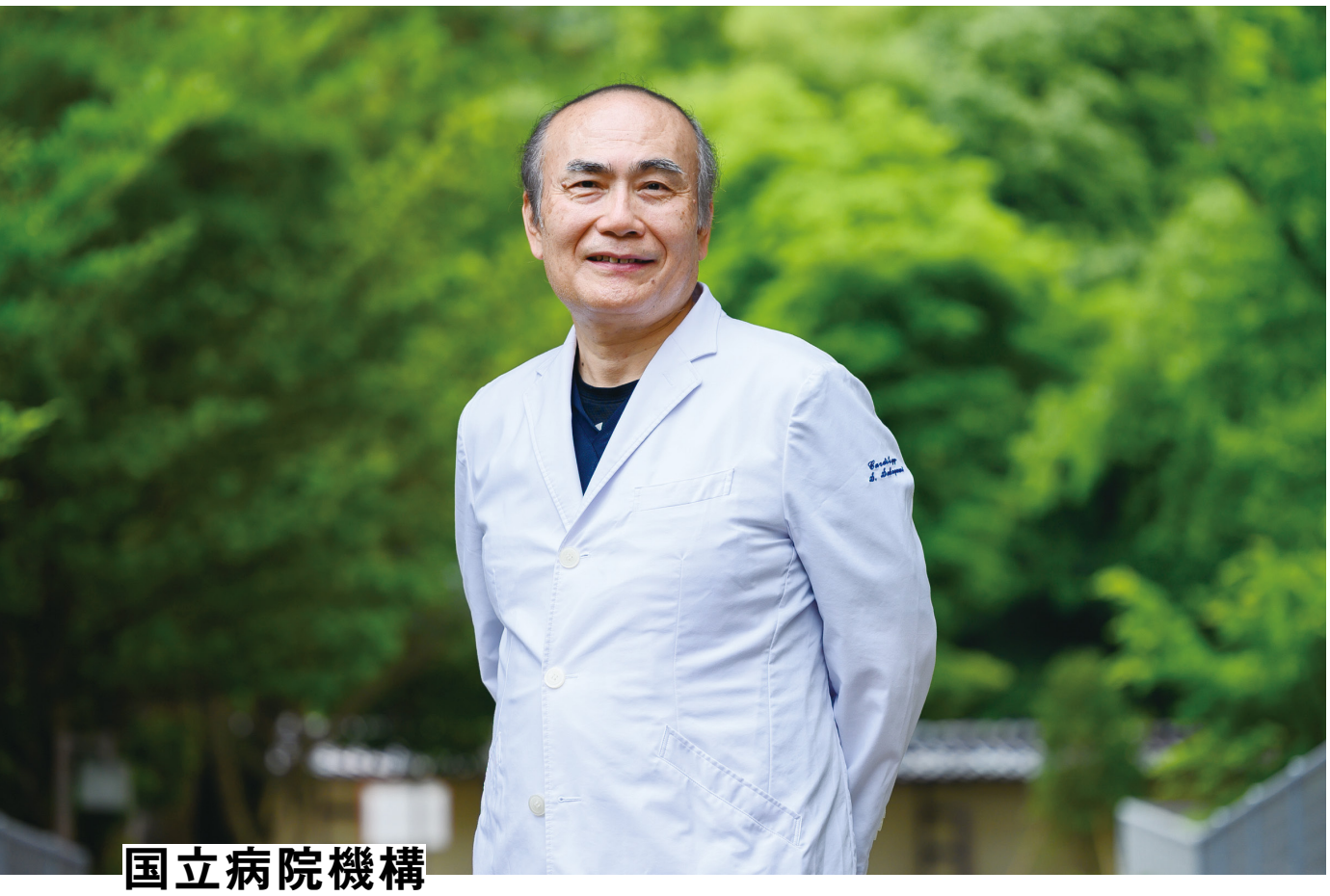
PROFILE

出身地：千葉県
出身大学：東邦大学（2023年卒）
宝物：思い出
座右の銘：継続は力なり

私は消化器内科志望ということもあり普段の研修から内視鏡に触れさせてもらっていますが、セミナーのハンズオンでは初期研修ではなかなか経験できない内視鏡的ポリープ切除術（ポリペクトミー）における止血処置を学ぶなど、とても貴重な経験ができました。このセミナーは自分で手を動かすことができる時間が多く、また講師の先生方も充実しており、きめ細かな指導と的確なアドバイスによって手技ができるようになる楽しさも知ることができました。また、他病院の先生方とのグループワークによって、一つの胸部画像、一つの症例についてさまざまな意見、考え方を聞けたことも非常に勉強になりました。

『令和6年能登半島地震』における災害医療対策本部の活動等について

NHOは災害医療に貢献することも重要な使命の一つです。金沢医療センターでは2024年1月1日（16時10分）に発生した『令和6年能登半島地震』にスタッフ一丸となって対応し、また、NHOとしてもDMAT・DPATによる医療活動や医療班の継続的な派遣により被災地の医療を支えてきました。自らも石川県の災害医療コーディネーターとして医療救護活動の統括・調整を担うなど、県の災害医療を支えた金沢医療センターの阪上 学院長に、能登半島地震における活動内容や経験から得た学び、今後の課題などについて話を伺いました。



国立病院機構

金沢医療センター

院長 **阪上　学**

平時からの訓練・準備と“顔の見える”連携が重要 経験を活かし、災害医療により強い体制を

迅速でスムーズな初動対応

能登半島地震による金沢医療センターの被害としては、医局や各部屋の図書、パソコンなどの落下、一部の窓ガラス破損、天井の剥がれ、敷地境界の石垣の崩落、エレベーター停止（これにより入院患者の夕食を人力で7階病棟まで運ぶ）などが確認されましたが、幸い院内患者さんへの被害はありませんでした。

私は地震発生から約30分後に病院に到着しましたが、既に当院のDMAT隊員が集まっており出動準備を始めていました。石川県内の各病院のDMATチームやDMATを管轄する県庁の医療対策課は＜LINEグループ＞でつながっており、地震発生後、直ぐにDMAT本部設置や派遣などの連絡・情報共有が行われ、地震当日の23時には当院のDMAT隊員たちが被害の大きい「公立能登総合病院」に向けて出発しています。

また、DMAT出動準備と並行して、当直の事務をはじめ駆けつけたスタッフたちによって「災害対策本部」が直ちに講堂に設置されました。その後、院内の被害状況の確認（報告の他、確認漏れがないよう臨床研究部長による病院内の見回り確認を実施）、指揮命令系統の確立、広域災害・救急医療情報システム（EMIS）への入力、NHO本部への連絡、スマートフォンアプリ〈SafetyLink〉によるスタッフの安否確認、災害拠点病院として当院の傘下（医療区）にある各医療機関の被災状況の確認を実施しました。

院内に大きな混乱はなく、スタッフたちは非常に落ち着いて対応をしていたのが印象的でした。

災害医療に強いNHOの実力

患者受入れ対応については、地震発生の翌日以降の数日間は骨折や頭部の怪我といった外傷系患者が多く、さらに被害の大きかった能登地域の透析患者さんや入院継続が難しい患者さん、高齢者施設などの入所者、金沢市の1.5次避難所／2次避難所における急病人などの受入れを行いました。（※1.5次避難所とはホテルなどの2次避難所に入るまで一時的に被災者を受け入れる施設で、高齢者、障害者、乳幼児などを優先。金沢市では県内最初の1.5次避難所を1月8日に開設）

当院では震災被害による患者急増に備えるため、病棟再編により未稼働だった「休眠病棟」の活用を決めましたが、対応する看護師などの人手不足が大きな課題でした。そこで、1月5日にNHO東海北陸グループの理事である名古屋医療センターの長谷川 好規院長（当時）に応援要請をお願いしたところ快く動いてくださり、3連休明けの9日から一部運用を開始し、10日からは全国のNHOからの派遣応援（医師1名：看護師16名が交代しながら担当）によって42床の臨時病床を稼働させることができました。

迅速な派遣応援がなければ医療提供体制を維持することは難しかったでしょう。応援スタッフのみなさんの災害医療に対する熱い思いは当院のスタッフたちの大きな刺激となり、モチベーションアップにもつながりました。また、NHO本部やグループとのやり取りのなかで励ましや温かい言葉をいただいたことも私たちにとって大きな精神的支柱となりました。

NHOでは当院へのスタッフ派遣だけではなく、医療班による避難所支援（1月5日から活動開始。穴水町や七尾市などの避難所支援や、1月7日からは甚大な被害のあった輪島市の避難所支援の中心的な役割担う）も行っています。NHOは被災地医療への貢献も大きな使命であり、DMAT・DPATによる医療活動や災害医療班の研修にも力を注ぐなど、全国140病院のネットワークを活用した災害支援を、いつでも迅速に展開できる体制を整えていることが強みです。

当院でも災害訓練を毎年実施しており、訓練の度に課題発見と改善を繰り返してきた成果と経験の積み重ねが、今回の能登半島地震におけるスタッフたちの迅速でスムーズな対応につながったのだと感じています。能登町の松波避難所では、正月休みで帰省していた当院の看護師も避難しており、避難所の準備や運営を取り仕切るなどリーダーシップを発揮しながら怪我人への対応も行いました。これも災害訓練による成果の表れだと思いますし、そうしたスタッフがいることに大きな誇りを感じました。

能登半島地震から見えた課題

当院における災害時の「BCP」（Business Continuity Plan：事業継続計画）では、2次医療圏内である金沢市やその周辺で地震が起きた際の自主登院基準が震度6弱以上（能登半島地震において金沢市は震度5強であり自主登院基準に当てはまらない）であり、今回のように2次医療圏外の近隣地域で自主登院基準を超える大震災があった場合の判断基準は設定されていません。そうした基準も明確にし、さらに安否確認のためのアプリ〈SafetyLink〉を上手く活用しながら適切な登院指示を行う必要があると感じました。また、帰省していたスタッフが電波圏外であったり、スマートフォンが津波に流されたことで、一部のスタッフの安否確認に遅延が生じるなど、〈SafetyLink〉を効率よく運用していくことも課題です。

さらに当院だけでは解決できない課題もあります。交通状況の悪化によって、患者受け入れ依頼があっても搬送が遅れ、前回の透析から4日経っていた患者さんが0時過ぎに到着したこともありました。搬送する自衛隊の車がパンクしたり、ヘリコプターによる搬送も悪天候時には運用できないなど、患者搬送が上手くいかない事態も多々発生しました。

また、災害救助法の適用基準や保険診療との併用の線引きが不明確であり、避難所では出来ない医療があったり、判断に迷う場面があるなど法制度の課題もあります。私自身、金沢市の1.5次避難所の初期運営に携わりましたが、厚生労働大臣とのやり取りによってなんとか避難所における医療体制を整えることができました。災害医療はスピード感が非常に大切であり、臨機応変に対応できる仕組みづくりや法整備が必要であると感じました。

その他、災害時には断水や貯水タンクの破損など水問題も生じるため、貯水タンクの強化や井戸水の有効活用も必要でしょう。

そして、今回の災害医療対応において非常に実感したのは、“支援の力”がどれだけ大きな助けになったかということです。各医療機関の「BCP」には受援体制づくりも反映させるべきですし、災害時に効果的な支援をスムーズに受けられるよう、自院の情報や被害状況を積極的に発信することも重要だと思っています。

大切なのは訓練と連携強化

災害医療は、特に全国から支援に入っていただける医療チームと地域の医療リソース（大学病院や各医療機関、医師会、保健所など）をどう繋ぐかが非常に大切な視点となります。私自身は、1月2日から災害医療コーディネーターとして約1か月間、県庁に詰めていました。コロナ禍の際にも約2か月間、県庁の新型コロナ医療調整本部に医療コーディネーターとして携わり、医療機関、施設、行政との架け橋を担うなど“顔の見える”関係を構築してきました。また、当院においても普段から地域の医療機関、施設、行政と緊密な連携を図っていたため、今回の災害医療対応でもハブ機能としての役割をスムーズに遂行することができたのだと思います。

今回の経験によって、災害時には、平時における緊密な連携、そして訓練や準備が極めて重要であることを改めて実感しました。当院では地域の医療リソースとのさらなる連携強化（特に急性期医療機関と慢性期医療機関、および福祉施設）を図り、DX化も推進していきたいと考えています。また、災害時には災害支援者も大きな惨事ストレスを受けるため「災害対応者は休むことも大切である」ことや、DMAT（本部）が高齢者施設の人を取りこぼしなく救うことにも注力し、さらに早期復興を実現するため、いかに現地でサポートをするか（全てを避難させてしまえば再建が難しくなるため）といった、その先の生活を見据えた支援活動の展開など、学ぶこともたくさんありました。

能登半島地震で得られた課題や学びをしっかり活かし、院内体制の見直し、次回の災害訓練への反映、さらに自治体や各医療機関への提言、意見交換、協力によって、より災害医療に強く、いつ何時でも安全で最良の医療を提供できる体制づくりを構築していきたいと思います。

PROFILE

出身地：福井県
出身大学：金沢大学（1986年卒）
宝物：家族
座右の銘：一隅を照らす

国立病院機構
金沢医療センター

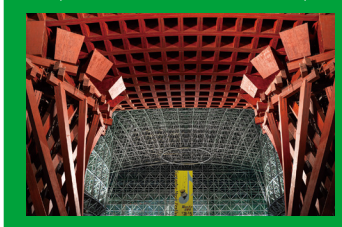
住所 〒920-8650
石川県金沢市下石引町 1-1
WEB https://kanazawa.hosp.go.jp

病床数 **554**床　診療科数 **22**科

［診療科目］

内科、精神科、脳神経内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、小児科、外科、整形外科、脳神経外科、呼吸器外科、心臓血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、放射線科、歯科口腔外科、麻酔科、緩和ケア内科

金沢医療センターのある街



金沢市は本州に位置する石川県の県庁所在地であり、歴史と文化が息づく都市です。江戸時代の風情が色濃く残る地区が点在し、美術館や伝統工芸でその名を知られています。市内には17世紀に造営が始まった兼六園があり、池や噴水などを取り入れた古典的な庭園は訪れる人々を魅了します。隣接する金沢城は、一向一揆の拠点であった浄土真宗の「尾山御坊」が攻め落とされた後、1580年代に本格的な建城が行われました。

金沢市は、約46万人の人口を擁し、北陸地方の中心都市として発展してきました。金沢21世紀美術館や伝統工芸の一端を担う加賀友禅など、多彩な文化・芸術が息づくこの街は、観光地としても人気があります。

PROGRAM

初期研修プログラムの紹介

国立病院機構 東広島医療センター

個々の希望に適う柔軟性の高い研修 設備環境や待遇面の良さも魅力

東広島医療センター 副院長 **豊田 和広**

東広島医療センターの初期臨床研修について

当院は、病床数401床（一般381床・感染4床・結核16床）、診療科25を有する、広島中央医療圏唯一の急性期中核病院です。「地域がん診療連携拠点病院」、「地域医療支援病院」、「地域災害拠点病院」、「地域周産期母子医療センター」に指定されており、さらに「救急輪番（二次救急）病院」として三次的救急患者も受け入れるなど、プライマリ・ケアから高度専門医療にいたるまで多種多様な症例が集まる病院です。研修医が1学年定員9名と大人数ではないため、十分な症例数と手技数をしっかり経験することができます。

全診療科と研修医が同じ一つの医局部屋であり、各診療科間の風通しが非常に良く、どの診療科の医師にもコンサルトがしやすいです。経験を重ねるうちに自然と「こういった症状は何科に相談やコンサルトするのが適切なのか」といった判断スキルも養うことができます。

給与など待遇面も手厚く、また設備環境も充実しており、研修医にも一人一台の電子カルテPCがあることも魅力でしょう。官舎は病院から徒歩5分と近く、部屋も広くて快適ですし、病院は閑静な場所に位置しており研修に集中できる環境です。また、毎週金曜日にネイティブ講師による英会話教室（自由参加）を無料で受けることもできます。

プログラムの特徴について

多くの主要な疾患群を外科的なアプローチも含めて研修することができ、循環器、呼吸器、神経、消化器については 希望に応じて臓器別の研修も可能です。内科から外科、外科から内科へと引き継がれる一連の流れで患者さんに接することができます。

研修プログラムは自由度が高く、1年次の4・5月の内科研修以外は一人ひとりの希望に沿ってプログラムを組むことができます。また、年間単位ではなく2、3か月前ごとに次のローテーション先を決めることができるなど、柔軟性の高さも特徴です。

救急外来や当直では研修医がファーストタッチを行います。当院に救命救急部はありませんが、各診療科の指導医・上級医によるきめ細かなフォローや指導・教育を受けることができるため、救急や当直を通して各診療科医師たちによる幅広い学びも得ることができます。

読者へのメッセージ

当院では、研修医一人ひとりのニーズ、自主性、個性を尊重した研修環境を用意しています。任される場面も多く（もちろん経験豊富な指導医や上級医のフォローも万全ですので安心して診療に臨むことができます）、3年目につながる確かな実践力と医師としての自信も得られるでしょう。研修では日々淡々と症例をこなすのではなく、一つひとつの症例を大切に学び、また何事にも積極的に関わって多くのことを吸収してください。初期研修で得たさまざまな学びと経験は、3年目以降、医師として成長し続けるための大きな財産となるはずです。

PROFILE

出身地：広島県
出身大学：広島大学（1987年卒）
宝物：研修医
座右の銘：和而不流

VOICE × 初期研修医

風通しが良く、着実に成長できる環境

初期研修医 2年目 **今井 天晴**

当院は風通しの良さが大きな魅力。それは救急外来を経験した際にすごく実感しました。ファーストタッチは研修医がするのですが、上の先生が一緒ですし、他科への相談やコンサルトもしやすく、みなさん嫌な顔一つせず快く引き受けてくださいます。安心して救急外来や当直に臨むことができる環境であるため、たとえば、救急搬送連絡の事前情報から必要な検査オーダーを出せるようになるなど、着実な成長を実感することができます。

PROFILE

出身地：高知県
出身大学：広島大学（2023年卒）
宝物：自分に残された限りある時間
座右の銘：一期一会

研修医にも一人一台の電子カルテ

初期研修医 2年目 **徳本 雄己**

疑問や症例を調べる際、研修医にも一人一台の電子カルテPCがあるため、「使いたいときに使えない」ということがなく、リラックスできる自分のデスクで誰にも気兼ねすることなく、いつでも自由に電子カルテを使えることは大きな魅力です。院内は開放的で、どの先生にも気軽にコンサルトができます。研修は自由度が高く、いろんな科を経験できるため将来の進路が決まっていない人も自分の進むべき道を見つけられるはずです。

PROFILE

出身地：広島県
出身大学：山口大学（2023年卒）
宝物：祖父に買ってもらった車
座右の銘：めりはり

国立病院機構
東広島医療センター

住所 〒739-0041
広島県東広島市西条町寺家 513
WEB https://higashihiroshima.hosp.go.jp

病床数 **401**床 診療科数 **25**科

東広島医療センターの特徴

1939年に設立された傷痍軍人療養所を前身とする、歴史と伝統のある病院。広島県中央地域に位置し、人口が増加傾向にある地域医療の重要な拠点として24時間365日、患者さんを受け入れている。また、政策医療としてがん、循環器病、呼吸器疾患、内分泌・代謝性疾患の専門医療施設として機能している。

アレルギー専門研修プログラムの紹介

国立病院機構 三重病院

高度な臨床力と研究力を獲得 優れた“総合アレルギー科医”に

三重病院 小児科・アレルギー科 臨床研究部長／指導医 **長尾 みづほ**

三重病院のアレルギー専門研修プログラムについて

当院は、「アレルギー疾患医療拠点病院」として三重県のアレルギー疾患医療の中心的役割を担っており、小児科、耳鼻いんこう科、眼科、内科が連携し、小児から成人まで多臓器にわたる多様なアレルギー疾患に対応しています。

研修では、アレルギー外来、食物経口負荷試験、経口免疫療法、経皮免疫療法、気管支喘息、アトピー性皮膚炎などの治療計画を、指導医・上級医のサポートを受けながら自ら判断して行うことで、専門的な幅広い知識と臨床スキルを確実に自分のものにしていきます。

アレルギー専門医資格取得はもちろん、小児から成人まで対応できる“総合アレルギー科医”としての確かな実力を獲得できます。さらに小児一般外来・小児一般入院・当直・ER対応なども行うため、小児科医としてさらなるスキルアップも可能です。

研修は自由度が高く、「研究をしたい」「学位を取得したい」「国内留学で学び、戻った後はリーダーとなってアレルギー診療をしたい」「子育てや諸々の事情で限られた時間しかないけれども勉強したい」といった個々のニーズや目標を尊重した研修を提供しています。

三重病院の研修環境について

“人を診る”こともアレルギー診療に重要なスキルです。アレルギーは治療効果の高い新薬が続々と登場していますが、治療効果を十分に得るためには薬の適切な使用が大切であり、そのためには患者自身や家族の協力が不可欠です。患者の特性や患者を取り巻く家族・社会といった生活背景を知り、問題があれば適切なサポートを行うこともアレルギー専門医の大切な仕事となります。当院に隣接して「特別支援学校」が併設されており、当院で長期入院中の子ども達も登校しているため、子どもの特性や生活背景が見えやすく、“人を診る”ことができる最良の環境にあることも特徴です。

また、当院では高い臨床力だけではなく研究力も獲得することができます。臨床研究部が設置されており、臨床研究、基礎研究、論文執筆、学会発表（国際学会にも参加）が盛んであり、さらに三重大学連携大学院であるため医学博士の取得も可能です。

働きやすさも魅力であり、診療体制はチーム制により個々の負担が少なく、業務は基本的に就業時間内に終了し、有休休暇も希望日に取得できます。また勤務時間の調整も可能であるため、子育て中の医師も無理なく研修をすることができます。

初期研修医のみなさんへメッセージ

アレルギー専門医はジェネラリストでもあります。どの診療科でも薬を出す以上、薬剤によるアレルギー発症の可能性があり、アナフィラキシー症状等への対応の研修は重要です。さらにアレルギー疾患は花粉症など有症率が高いものもあるため、将来どの診療科に進もうともアレルギーに対する一定の基礎知識は必要です。医学生や初期研修のうちにアレルギーに触れておくことは非常に重要であり、そうしたなかで一人でも多くの医師にアレルギーに興味を持っていただき、奥深いアレルギーの世界に足を踏み入れてくれたら嬉しく思います。

PROFILE

出身地：三重県
出身大学：岐阜大学（1997年卒）
宝物：家族
座右の銘：ケ・セラ・セラ

VOICE × 専門医

研究活動も盛んで、国際学会発表も経験

岩井 郁子

長期入院の子ども達も通学する「特別支援学校」が併設されており、“生活も診る”ことができる環境です。複雑な家庭環境の子どもには地域や関係各所と連携しながら家庭や原籍校に戻るためのサポートを行うなど、治療や社会復帰への幅広いアプローチも学べます。研究・学会活動も盛んで、私もハワイやスペインの国際学会で発表しましたが、多くの海外医師に興味をもっていただくなど当院の研究レベルの高さを改めて実感しました。

PROFILE

出身地：岐阜県
出身大学：福井大学（2013年卒）
宝物：家族
座右の銘：継続は力なり

“求めよさらば与えられん”の環境がある

有馬 智之

研究、論文執筆、学会発表なども盛んですし、小児アレルギーの最新治療も学べます。雰囲気は抜群に良く、上司の部屋の扉はいつも開かれており、気軽に意見や相談することができます。“求めよさらば与えられん”の環境があり、努力していれば必ず上司や周りが助けてくれますし、求めれば求めるほど得られるものも大きい場所です。全国各地から集まってきた同世代の仲間と共に切磋琢磨しながら学べることも魅力です。

PROFILE

出身地：山口県
出身大学：近畿大学（2014年卒）
宝物：家族、走り続けられる身体
座右の銘：倒れる時は前のめり

国立病院機構
三重病院

住所 〒514-0125
三重県津市大里窪田町 357
WEB https://mie.hosp.go.jp

病床数 **260**床　診療科数 **14**科

三重病院の特徴

小さな子どもから高齢者まで社会的弱者を支える総合成育医療機関である。小児医療、重症心身障がい児医療、神経難病医療、リハビリテーションなど、多岐にわたる医療サービスを提供。また、地域との連携を強化し、医療だけでなく健康増進活動や予防医療にも力を入れ、地域全体の健康向上に寄与している。

MESSAGE

理事長メッセージ

未来を見据えて——
国立病院機構の新たなビジョン
～挑戦と展望、新たな一歩を共に～

理事長 **新木 一弘** あらき かずひろ

PROFILE

1985年 3月 慶應義塾大学 医学部 卒業
1985年 4月 厚生省 入省
2001年 7月 厚生労働省 医政局総務課 医療安全推進室長
2003年 8月 広島県 福祉保健部長
2006年 9月 厚生労働省 医政局研究開発振興課長
2008年 7月 文部科学省 高等教育局医学教育課長
2011年 7月 社会保険診療報酬支払基金審議役
2012年 8月 厚生労働省大臣官房付
2012年 9月 南魚沼市立 ゆきぐに大和病院 医長
2013年 4月 福島県立医科大学 客員教授
2016年 4月 慶應義塾大学 医学部 特任教授
2017年 4月 国立病院機構 東京医療センター 副院長
2020年 4月 国立病院機構 東京医療センター 院長
2020年 4月 国立病院機構 理事（非常勤）

NHO 新たな時代へ

この度、令和6年4月より国立病院機構の理事長を拝命いたしました、新木一弘です。国立病院機構は全国に140の病院を有し、総病床数は5万床を超える日本最大の病院組織です。独立行政法人として効率的かつ自律的な運営を行い、医師・看護師をはじめとする全職員の努力により、社会の期待に応え続けてまいりました。

NHO 目指す方向性

国立病院機構は、診療、調査・研究、教育研修を行うことが法律で定められています。これらの機能を安定的に、かつ継続的に向上させることが最大の課題です。特にコロナ後の厳しい状況においても、これらの分野を育て続ける必要があります。私の就任時に掲げた4つの目標の一つは、国の医療政策に貢献し、国民の信頼に応えることです。具体的には、コロナ対策、感染症対応、災害対策、医療DXなど、多様な要請に応えることが重要です。また、地域医療への貢献も大きな役割です。地域医療を中心に据えながら、国の期待に応えられる機能を発揮し、人材の確保と育成、臨床研究の充実を図っていきます。

NHO 医師の働き方改革

令和5年度からは、新たな勤務時間管理方法の導入・運用を開始しました。客観的な記録に基づく新たな勤務時間管理方法を実施するため、モデル病院における検証及び課題等を踏まえ、ICカード・ICカードリーダーを利用した勤務時間管理を適正に実施しています。各病院の勤務時間システムをHOSPnet・人事給与システムへ自動連携させることにより、本部において各病院の勤務時間関連データが集積可能となり、病院への個別調査を削減させるなど業務の効率化を図りました。

NHO 教育・研修体制の強化

国立病院機構では、医師の教育・育成にも力を入れています。地域の中核病院として多彩な医療体験ができる環境を提供し、質の高い医療従事者の育成を推進しています。特にセーフティネット分野において、一般の病院では経験できない医療体験を提供し、未来の日本の医療を支える人材の育成に貢献しています。研修医の皆さんには、さまざまな病院での特徴的な研修が可能であり、都市部の急性期病院から地方の医療機関まで、多様な環境での研修が提供されています。

NHO 未来を担う医師への期待

最後に、国立病院機構に勤務する臨床研修医・専攻医の皆さんにお伝えしたいことがあります。国立病院機構では、多彩な診療活動を行っており、若い先生方にとって充実した研修ができる環境を提供しています。研修医の皆さんには、知識や技術の習得だけでなく、人間力も大切にし、患者さんやご家族との信頼関係を築き、説明責任を果たすことを忘れずに努めてください。皆さんが将来の日本の医療を支える主役となり、その能力を存分に発揮し、大いに活躍されることを期待しています。

国立病院機構の未来を共に築いていくために、皆さんのご理解とご協力をお願い申し上げます。

BACK NUMBER × バックナンバー

過去の「NHO NEW WAVE」がWEBサイトから閲覧できます！

https://nho.hosp.go.jp/education/education_nho.html

NHO ニューウェーブ 検索

NHO facebook & 𝕏 本部公式アカウント

facebook https://www.facebook.com/nho.headoffice

𝕏 https://twitter.com/nho_headoffice

本部のSNSで発信したい情報があれば広報係までご相談ください！